

キュレネ派における〈予-考慮〉(praemeditatio)の内実

——キケロ『トゥスクルム荘論集』III 28-31 の検討

長尾 証輝(東京大学)

いわゆる「現在主義」(presentism)は、「快樂主義」とともに、キュレネ派倫理思想の根幹をなす一大契機だと見なされてきた。関連する諸証言(アイリアノス『雑話集』XIV 6; アテナイオス『食卓の賢人たち』X II 544)をどのような仕方で解釈するにせよ、「いま目の前の現実」に対する選好は、キュレネ派全体を特徴づける印象的な要素である。

しかしながらキケロは、『トゥスクルム荘論集』第三巻において、〈予-考慮〉(praemeditatio)※という明らかに「未来」志向的な実践を、ほかならぬキュレネ派に帰している。——「キュレネ派の考えによると、苦悩は、すべての悪ではなく、予期せぬ不測の悪によって(insperato et necopinato malo)もたらされるのだ。確かに、予期せぬ不測の悪は、苦悩を極端に増大させる。なぜといって、突然の事象は、すべて重大に思われるからである。[...]そういうわけで、このとき、未来の悪の〈予-考慮〉(praemeditatio futurorum malorum)は、それらの接近を和らげる。貴君は、それらの到来を、はるか以前から予見していたのだから。[...]以上の理由から、私はまさしく、不幸な巡りあわせに対抗する武器を、キュレネ派から受け取っているのだ。この武器、すなわち永続的な〈予-考慮〉によって、それらの迫りくる攻勢は粉碎される。[...]」(III 28-31)

いうまでもなく、キケロが報告する〈予-考慮〉実践は、キュレネ派の現在主義とのあいだで、「一見したところの矛盾」(Laks)をきたしている。そのため、従来の先行研究においては、当該証言の正確さを低く見積もる論調が優勢であり、キケロの具体的な報告内容を正面からありのままに受けとめようとする試みはほとんど行われてこなかった。しかるに他方、近年はLampeらを中心にキュレネ派現在主義の見直しが進められつつあり、その結果、〈予-考慮〉の存立する余地が少しずつ広がってきた観もある。本発表の主眼は、こうした研究史上の展開を踏まえたうえで、キケロの当該証言を肯定的に再解釈することにほかならない。こうした試みは、翻って、キュレネ派現在主義の内実を捉えなおそうとする最新の研究動向にも寄与するものとなるだろう。

ここでは、本発表が取り組む重要な論点を概観しておく。

A. 文献学的問題

第一に、証言の信憑性をめぐら問題に言及する必要がある。前述のとおり、現在主義との「矛盾」を重く見た結果、当該証言の信憑性そのものを疑うに至る研究者は少なくない。たとえばMannebachは、自身の編纂するキュレネ派資料集のなかから、〈予-考慮〉に関する証言をすべて削除した。ここまで極端に傾く論者は稀だとしても、キケロの記述がなんらかの誤謬を含んだものであるという見解自体は、さして珍しいものでない。他方、こうした風潮に対し、Graverらは、当該証言の信憑性を(少なくとも一時的には)認めるべきだと主張している。本発表では、後者の陣営に与する立場から、キケロの証言内容が尊重に値するといえる複数の理由を提示していきたい。

そのうえで、第二に、証言として利用可能な範囲を画定する作業が求められる。当該証言においては、比較的短い分量のなかで、エピクロス、キュレネ派、エウリピデス、アナクサゴラス、テレンティウス、ソクラテスといった多くの思想家・文人たちが

登場する。また、主要発言者(M)の持論と、彼が引証する逸話・学説類との境界線も、時にきわめて曖昧である。かくも錯綜した論述において、キュレネ派の学説それ自体を伝えていると判断できるのは、どこからどこまでなのだろうか。本発表では、O'Reillyによる最新の分析をもとに、キュレネ派とレレバントな要素を特定・抽出することを目指す。

B. 哲学的問題

Graver, Warren, Lampeといった近年の主要な先行研究は、「〈予-考慮〉されない悪のみが苦悩をもたらす」という強烈なテーゼを、「〈予-考慮〉されない悪が苦悩を増大させる」という穏健なテーゼへと矮小化してしまっている(引用箇所第二文「確かに(quidem)」以下をキュレネ派へ帰すことには、テキスト解釈上の問題がある)。とはいえ、Lampeが懸念したとおり、前者のテーゼをそのままの形で活かすことにも、解釈上の困難が付きまとう。なぜといってそれは、「知者にも避けることのできない本性的な苦悩が存在する」というキュレネ派自身の教説(cf. ディオゲネス・ラエルティオス『哲学者列伝』II 91)と、明確に食い違っているように見えるからである。

本発表では、こうした窮状を解決するための糸口として、「純粋な精神的苦悩」と「二次的な(身体的苦痛に後続した)精神的苦悩」との区別を示唆する『哲学者列伝』II 89の証言に注目する。このとき、〈予-考慮〉の射程が後者の苦悩に限定されたものであると見なせれば、「知者の苦悩」という教説を、問題のテーゼと整合的な仕方で理解する道が拓けてくるであろう。

以上のような「限定」の可否は、結局のところ、当該証言における「悪」(malum)概念の内実をどのようなかたちで理解するか依存する。もし仮に、キュレネ派が想定していた「悪」の外延を、身体的な「苦痛」(≠精神的「苦悩」)のみに絞り込むことが可能であれば、「純粋な精神的苦悩」について、特別の考慮を払う必要がなくなるからである。

※ praemeditatio という語彙はキケロの造語であると思われ、彼以前に用例を見出すことができない。それゆえ、語の成り立ちを正確に再現するためにも、あえて人工的な訳語を採用する。

《本要旨で言及した文献》

- M. Graver, 2001, 'Managing Mental Pain: Epicurus vs. Aristippus on the Prerehearsal of Future Ills,' in *Proceedings of the Boston Area Colloquium in Ancient Philosophy*, 17, pp. 155-77.
- A. Laks, 1993, 'Annicéris et les plaisirs psychiques. Quelques préalables doxographiques,' in J. Brunschwig, M. C. Nussbaum (eds.), *Passions & Perceptions: Studies in Hellenistic Philosophy of Mind*, Cambridge University Press, pp. 18-49.
- K. Lampe, 2015, *The Birth of Hedonism: The Cyrenaic Philosophers and Pleasure as a Way of Life*, Princeton University Press.
- E. Mannebach, 1961, *Aristippi et Cyrenaicorum Fragmenta*, Brill.
- K. O'Reilly, 2019, 'Cicero Reading the Cyrenaics on the Anticipation of Future Harms,' in *Epoché: A Journal for the History of Philosophy*, 23, 2, pp. 431-43.
- J. Warren, 2014, *The Pleasures of Reason in Plato, Aristotle, and the Hellenistic Hedonists*, Cambridge University Press.